

術中神経モニタリングにおけるチェックリストの運用と安全管理の現状について

◎木村 友稀奈¹⁾、高谷 恒範¹⁾、溝端 亮兵¹⁾、加藤 順子¹⁾、山本 さよみ¹⁾、吉田 秀子¹⁾、田中 忍¹⁾
奈良県立医科大学附属病院¹⁾

【背景】

手術後の神経機能障害は、患者の機能的予後に関わる重大な問題であり、これを予防するための術中神経モニタリングの役割は重要である。当院では、様々な手術でモニタリングが実施されており、その内容は患者の病態により多岐にわたる。さらに、手術という即時的な対応が求められる環境下ゆえに、モニタリング上、異常が見られた場合の対応はその手術を担当する少数のスタッフの判断に委ねられているのが現状である。また、モニタリングのための機器設置や波形の解説に関するピットホールが数多く存在する。そのため、より信頼性と安全性の高いモニタリングを実施するには、個人の知識と経験に頼るだけでなく、担当するスタッフ間の情報共有とその対応を標準化することが重要である。我々は、その方策としてモニタリング時のチェックリストと波形変化時の対応フローチャートを導入し、その効果について検討した。

【方法】

モニタリング時のチェックリストと波形変化時の対応フロ

ーチャートを導入し、「導入前」（2006年12月～2015年6月）と「導入後」（2015年7月～2016年7月）について比較検討した。

【結果】

チェックリストとフローチャートの導入前後におけるモニタリング施行件数はそれぞれ821件、および390件であった。術操作以外の原因による波形低下出現の件数は導入前で99件（12.1%）であったが、導入後は4件（1.03%）に著明に減少した。

【結語】

チェックリストとフローチャートを導入し、スタッフ間の情報共有と対応の標準化を行ったことで、術中神経モニタリングの信頼性と安全性が向上したと考えられた。

連絡先 0744-22-3051(内線 4240)